

【山崎名誉主宰の俳句】

ひたすらに

山崎 聰

いまもって秩父往還年の暮  
この道をまっすぐ行けば冬の墓  
ひたすらにきょうを炭焼竈として  
世のおわりそのいちにちを雪降って  
雪晴れのまぶしき日々のすべり台  
逡巡も邂逅も冬のいちにち  
就中かの日かの夜の雪の山  
男には見えて遠嶺の初日影  
いまも楼蘭しろじろと寒の餅  
二年一月三日の朝のモーツアルト